別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　飯島雄大

「心配」は、否定的な結果が予測される問題を解決するための方略と考えられるが、それが過剰になると心理的不適応を引き起こす。臨床心理学からみると、心配はさまざまな精神疾患でみられ、さらに全般性不安障害においては「過度の心配」ということが診断の基準とされている。こうした病理的な心配の発生・維持を説明するために、いくつかの認知モデルが提案されてきた。これらの認知モデルに共通する要因が、「心配に関するポジティブな信念」と、「思考抑制」などの認知的回避である。心配に関するポジティブな信念とは、心配は有益なものであるという信念の事であり、こうした信念が強い者は、問題解決の方略として積極的に心配を用いると考えられている。また、思考抑制は対象の思考を増大させることが知られており、心配を制御するための思考抑制によって、より心配が持続してしまうと考えられている。

本論文は大きく２部に分けられ、第１部では、心配に関するポジティブな信念が心配に及ぼす影響について検討し、第２部では、思考抑制と心配の関係について検討した。

第１部の研究１では、縦断調査を用いて、心配に関するポジティブな信念が心配に及ぼす影響について検討をおこなった。その結果、心配に関するポジティブな信念から心配への直接的な効果は確認されなかったが、ストレスイベントとの交互作用が確認され、心配に関するポジティブな信念は心配を調整要因であることが示された。つまり、心配に関するポジティブな信念が高い者ほどストレスイベントを経験した際に心配するということが示唆された。

第１部の研究２では、ESM を用いてポジティブな信念が日常生活における心配に及ぼす影響を検討した。ESM とは、日常生活における行動や思考などの体験を、小型のデバイスや携帯電話を用いてその場で測定する方法であり、生態学的妥当性の高い測定法である。ESM によって、日常生活における心配、ストレスイベントについて測定を行った。その結果、研究１と同様に、心配に関するポジティブな信念とストレスイベントの交互作用が確認され、心配に関するポジティブな信念が高い者は、ネガティブライフイベントに遭遇した際により長く、より強く心配することが示された。さらに、日常的な心配の積み重なりが、心配の病理的な側面である統制不能感を予測することが明らかになった。

第２部の研究１では、縦断調査を用いて、思考抑制が心配に及ぼす影響について検討した。その結果、思考抑制は、ストレスイベントとは独立に心配を予測することが示され、

思考を抑制することで心配が持続してしまうことが示唆された。

第2部の研究2では、思考抑制がどのように心配を持続させるかを抑制のリバウンド効果に着目して検討した。リバウンド効果とは、思考抑制を試みた後に対象となる思考の侵入が増大することである。心配を抑制する実験を実施し、抑制中および抑制前後における心配の発生頻度を測定した。その結果、心配性傾向と抑制中の心配の発生頻度の交互作用が有意に抑制後の心配の発生頻度を予測した。下位検定の結果、心配性者は、心配を抑制している最中の侵入確率が高いほど、リバウンド効果が顕著に表れることが示された。しかし、心配性傾向が低い者においてはこの傾向は見られなかった。このことから、心配性者は心配の抑制に失敗することで心配を持続させ、増加させてしまうことが示唆された。

本論文においては、以下の諸点が高く評価された。

１．心配の発生・維持に関する認知モデルに基づき、実証データに裏付けられた確実な議論を行ったこと。本研究により、心配に関するポジティブな信念には心配を促進させるような役割があり、思考抑制は心配を持続させるように働くことが明らかとなった。

２．研究の方法論において、先行研究では横断調査による検討に留まっていたため、因果関係の検討が不十分であったが、本研究では、先行研究の限界を補うために、縦断調査の手法を取り入れた。これにより因果関係に踏み込んだ検討をおこなうことができた。また、実験室における検討だけではなく、経験サンプリング（ESM）の手法など生態学的妥当性を高めた方法を取り入れ、多様な手法を用いて心配を取り巻く現象を検討している。こうした方法論的な面も評価された。

３．本研究は、臨床場面から得られたモデルを出発点として、それを健常な大学生を対象とした研究に応用したものであり、本研究の知見は、大学生の精神健康の予防において示唆するところが大きい。また、本研究で得られた実証的で確実な知見は、臨床場面における認知モデルを支持し、また心配を主症状とする全般性不安障害などに対する介入法にも確実な示唆を与える。こうした実践的な点でも高く評価された。

以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされており、第1部の研究2および第2部の研究2は、本学の倫理審査委員会において承認を得ている。

なお、第2部の研究2は専門誌 Personality and Individual Differencies に公表済みである。

以上の成果により、本論文は博士（学術）の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。